

同じ病名でも、一人ひとり違う症状

田中律子先生(大阪/湯里住吉教室)

田中先生は、通常の教室日以外に週二日、月・木曜に、四人の“障害児”を指導しておられる。その四人の子供たちの病名はつぎのとおり。

U子ちゃん = 小5 ダウン症、てんかん、上顎異形、IQ = 27

K君 = 小5 ダウン症、自閉的傾向、IQ = 30

M子ちゃん = 小5 サリドマイドによる指の異形、ダウン症、IQ = 30

I君 = 小5 自閉症、IQ = 50

プロローグ

以上の病名はそれぞれ、医師および相談員からの診断。現在、全員地元の小学校の養護学級に通っている。この子たちと田中先生の出合いは、五十三年の六月のことだった。もともと、先生と知り合いだったU子ちゃんのお母さんが、あるとき先生に相談をもちかけてきた。

「U子が二十歳になるまでに、何とか、買い物ぐらいはできるようにし

てやりたいのです。今までにも家庭教師を頼んだりしてみたのですが、U子のほうが、それらの先生を受けつけません。公文式で何とかならないでしょうか」

ということだった。田中先生はそれまでに、肢体不自由児を四人指導してきた経験はあったが、ダウン症、自閉症児は初めてだった。

「私に、なついてくれさえすれば、なんとかやれるだろうと思い、とにかく子供と会ってみました。U子ちゃんは会うなり、いきなり訴えるのです。

『せんせ、さんすうむずかしい。キライ!』と。それが、不自由な発音ながら、本当に実感がこめられているんですね。ずいぶん算数でつらい思いをしてきたのでしょう。胸が熱くなり、『先生も、むずかしい算数大キライよ。楽しいお遊びでやろうね。一緒にやろう!』と思わず叫びました。そして、一時間ほどU子ちゃんと面接をして、帰りがけにむこうから握手を求めて来たのです。『そのときこれならできる』と、確信しました。」

“積木”と“漢字カード”で興味を

その後、”U子ちゃんのお母さんの紹介で、七月にK君、九月にM子ちゃん、十一月にI君が入会。指導形式は一对一である。月に二

回ほどは他の人との協調性を養うため、四人合同での指導を試みているが、まだ、やはり気が散るそうである。

「まず、どうやって私の身近な場所に座らせるか、ということから始めなければなりません。多動性”というのでしょうか、なにしろじっとしていないのです。この対策には“かずあそび”と“漢字カード”を使いました。あの子たちがチョコ、チョコ動き回っていても、私ひとりで積木やカードをやっているのです。すると、やがてそれらに興味をもって、近寄ってきます。そこを巻き込んで一緒にやるようにしました」

同じダウン症といっても、一人ひとり違う。積木やカードだけで二か月を費した子もいれば一回目の学習からプリントに入れた子もいたそうである。

以下、四人のうち、もっとも症状が重い U 子ちゃんの学習経過を追ってみる。

U 子ちゃんの場合

入会時の状態 = 1 ~ 20 まで、数唱も不確か。

〔五十四年六月 ~ 八月〕

AA1 を見せてもまるで興味を示さない。積木の 1 ~ 9 をとり出し、数唱しながら箱の蓋の上に載せる遊びを繰り返す。また、「数字」、「指

の絵」、「」の積木をセットにする遊びをやる。指は比較的早く理解するが、「」で少し戸惑う。

積木と同時に漢字カードを使う。「胡瓜」「傘」「葡萄」など、身近なものから驚くほど早く覚える。




十月からは、大判カードを使用した。従来のものより、さらに興味を示す。二週間後に二十枚全部を覚える。

積木、カードは家庭でも毎日やらせる。

〔九月初旬〕

指導を始めてから二か月目。初めて AA1a の左側だけさせてみる。点数をなぞるのが苦痛のようだ。点数からはみ出すと神経質に消して直す。一回の学習平均三枚。(0 枚のこともある)

〔十月〕

AA1 の  の数が数えられるようになった。しかし、 は 2 と書けるが  がわからない。指の力が極端に弱い。鉛筆をすぐ落とす。4B の鉛筆に紙を巻いて太くしてやる。とても数字が安定してきた。

マル A 教材を与えてみるが、点線をなぞるのが苦手な U 子ちゃんには苦痛らしい。AA 教材に戻す。

〔十一月〕

物を五つまで数えられるようになる。そのことを知った学校の先生が2+3、1+4など、“たして5”までの問題をやらせたために大混乱。積木、漢字カードは相変わらずお気に入り、毎日、朝夕に一人を出してやっている。

普通の鉛筆が握れるようになる。

〔十二月〕

AA11に入れてみる。1と2の区別はスラスラできるが、3と4を時々混同する。

〔一月〕

一月末までにAA教材を約二百枚学習、そのときの進度、AA16。

どうせ、できないという先入観に怒り

「四人だけに関しても、症状は違うし、学習に対する興味もまるで違います。ひとつの事例だけで、公文式はダウン症児に効果的なんだと結論は下せません。また、他の子の事例どおり指導しても、うまくいくとは限りません。でも、効果がどうのこうのは、学者にまかせておけばいいと思います。効果がはっきりしないから何もしないというのでは、あまりにもその子たちがかわいそうです。

理論がどうあれ、物が数えられなかった子が、現実に数えられるよう

になり、数字が書けるようになっているのです。私たちに、ダウン症という病気が治せるわけではありません。できる可能性のあることを、一つでも、二つでも実際にできるようにしてやることだと思います。例えば、覚えられる漢字をなぜ今まで覚えさせなかったのか、本当に腹が立ちます」

田中先生は、学校の養護学級の授業を、自分の指導の参考にと、見学に行ったそうである。

「私の見学させていただいたのは、たまたま、ひどい授業でした。算数の時間でしたが、先生が黒板に、 $4+3=$ と書いて、一人の生徒に当てます。生徒が答えられないと、生徒の手を持って、『4と3が合体するといくつ？ 7でしょ！ わかったね』少し極端な表現ですが、大体、この様です。

これじゃ、普通の生徒にだって苦痛です。もちろん、養護学級の先生みんながこの様ではないでしょうが、世間一般でも、『どうせ、できないだろう』という先入観は、かなり根強いようです。

“障害”を持った子に接してると、普通の子の気持まで読めるようになるのです。生意気な言い方ですが、“障害児”教育は教育の原点という感じです。より繊細な神経にふれて、見過ごしがちの子供の気持に気づきます」